

国際財務報告基準の歴史

1120386 西川幸佑

高知工科大学マネジメント学部

はじめに

国際財務報告基準 (IFRS) の登場によって、多くの国が自国の会計基準にこだわる事をやめ、IFRS をアドプション (採用) またはコンバージェンス (収斂) する流れになっている。IFRS の導入に消極的であった日本でも、2010 年 3 月以降に IFRS の任意適用を認めた。いずれ強制適用となるのは間違いないと思われる。その一方で、会計ビックバンと呼ばれる、IFRS の導入による日本の会計制度の大きな変更を不安視する動きもあった。その二通りの反応が、自分に、IFRS に対する興味を抱かせた。世界共通の会計基準 IFRS がどのような経緯で生み出されたのかを研究対象としたい。

1 IFRS の意義

会計基準とは、企業の財務状態や業績を正しく把握するためのルールで、その役割からたびたび企業を測るモノサシと例えられる。IFRS(International Financial Reporting Standards) は、国際的 (International) な活用を目的とした会計基準である。多国籍企業や、インターネットの発達による投資家の海外への投資といった、会計のグローバル化によって、国際的に統一された会計基準の必要性が生まれた。

2 IASC 誕生

1973 年、オーストラリア、カナダ、フランス、西ドイツ (当時)、日本、メキシコ、オランダ、イギリス及びアイルランド、アメリカの 9 カ国の職業会計士団体が集まり、国際会計基準委員会 (IASC) を組織し、国際会計基準 (IAS) を設定した。

ちなみにイギリスとアイルランドが一ヶ国扱いになっているのは、両国の職業会計士団体が共同で会計基準を設定する間柄にあったためである。

しかし IASC は各国の会計のスペシャリストの集まりで

はあるものの、あくまで民間組織であり、IAS のルールを各国に強制・遵守させる影響力はなかった。

3 強制力のある国際会計基準作成

1988 年 11 月に IOSCO は、IASC の比較可能性改善プロジェクトを積極的に支援する方針を打ち出した。IOSCO は証券規制の国際的調和化および各国の規制当局間の強調を図るために設立された国際組織である。IAS の使用を遵守させる強制力のある IOSCO からの支援は、IASC にとって渡りに船だった。そして IASC は IOSCO と強調し「財務諸表の比較可能性改善プロジェクト」を開始した。このプロジェクトの目的は以下の二つである。

- (1) 代替的会計処理が、類似する取引および事象に関する自由な選択としてある場合には、1 つの会計処理を除き他の全部を除去すること
- (2) 代替的会計処理が、異なる状況において適用しなければならぬ異なる会計処理としてある場合には、適切な会計処理が採用されるようにすること

このプロジェクトは 1993 年 11 月に完了し、IAS は IOSCO からの支援を受けられるはずだった。

しかし、1993 年 6 月に IOSCO は、IAS には包括性が欠けており、さらなる質の向上が必要であると判断し、国際的な資金調達で用いられる財務諸表を作成する際に適用されるべき中核かつ包括的な会計基準のリストを「コア・スタンダード」として IAS から抜き出して選択・決定することを要求してきた。この作業は、2000 年 3 月、IASC 理事会の IAS 第 40 号「投資不動産」の承認をもって完了した。2000 年 5 月、シドニーにおいて IOSCO による IAS への支持表明が行われた。

4 IASB

IASB はコア・スタンダードの完成が近づいた段階で今後の方向性を検討し、設立以来、理事会と起草委員会という二院制構造だったのを一院制構造にするなど大規模な組織改革を行なった。この改革によって国際会計基準委員会 (IASB) は 2001 年に国際会計基準審議会 (IASB) へと生まれ変わった。

2000 年 4 月に承認された当時の「国際財務報告基準に関する趣意書」によれば、IASB の目的は、次のとおりである。

- ① 公共の利益のために、高品質で理解可能かつ強制する一組の全世界的な会計基準を開発すること。その基準は、財務諸表およびその他の財務報告において、高品質で透明かつ比較可能な情報を要求し、世界のさまざまな資本市場の参加者およびその他の情報利用者が経済的意思決定を行う助けとなるものであること
- ② それらの基準の利用と厳格な適用を推進すること
- ③ 各国の会計基準と IFRSs との高品質の解決に向けて収斂をもたらすために、各国の基準設定主体と積極的に共同すること

現在 IFRS はフランス、イギリス、ドイツ、インド、タイなど多くの国に受け入れられており、そのグローバル・スタンダードとしての完成度の高さが伺える。日本も 2010 年 3 月以降に IFRS の任意適用を認めており、2015 年ごろに導入することを予定していたが、東日本大震災などの影響から、現在は未定となっている。

おわりに

IFRS の導入はすでに避けられない流れになっており、日本はその流れに乗り遅れていると言わざるを得ない。しかしだからと言って導入を急ぎすぎるのは、会計ビッグバンの時のように無駄な混乱を引き起こすだけのように思える。日本はいつ、グローバル・スタンダードに参加するべきなのか。今回の研究で学んだことを足がかりに、今後の課題として取り組んでいきたい。

参考文献

- ・長谷川茂男[2006]『世界が動く 日本が変わる 会計 [2009 年] 問題』中央経済社
- ・橋本尚[2007]『2009 年 国際会計基準の衝撃』日本経済新聞出版社
- ・高浦英夫[2009]『IFRS 国際会計基準で企業経営はこう変わる』東洋経済新報社
- ・戸村智憲[2009]『IFRS リテラシー：国際会計基準の経営への影響を読み解く』ブイツーツソリューション